

ベルギー若手作家の現況：酒井信一

(国際現代美術実行展委員会代表、ギャラリー・サージ ディレクター)

我々は、1991年に「日本・ベルギー現代美術交流展」を開きました。そこでの経験をもとにして、ベルギー現代美術の状況、とりわけ、若手作家の制作のようすや問題意識のありようを伝えてみようと思えます。

この交流展は、4月に東京の浅草金竜小学校旧校舎を会場として、日本、ベルギー双方の作家計20数名が集まり、半年後の10月には、同一のメンバーが、ブリュッセルのサンカントネール公園に場を移して制作を競ったものです。これは、美術館などの

ような、静態的で制度的な場をはなれて制作と展示をおこなったこと、二つの地でそれぞれ、実作に費やした約2週間のあいだ、作品の理念や創造の方法に関して、作家同士がコミュニケーションを取りながら活動したことなど、きわめて実験的な試みでした。また、異なった文化状況に投げ込まれたときに、自分の作品がどのように立ち上がってくるのか——東京においてはベルギーの作家が、ブリュッセルにおいては日本の作家が直面した状況——を、作家自身が、おおいなる冒険として引き受けた機会でも

ありました。

ベルギーの作家のうち、何人かの例を解説しておきます。東京で、ベルナール・ヴィレルが創り出した〈ウルトラマリン〉は、ヨーロッパの洗練された工芸技法を用いて、日本古来の無駄を省いた静謐な空間に、ある種の濃密さを重ね合わせようとした作品と言えます。このように、従来の自己の制作傾向を捨て、まったく新たな作品を創ろうと努めた作家もいれば、反対に、場がどう変わろうと、いままでの制作方針がどこまで通用するかを試そうとした作家

います。その代表はミッシェル・ムーフの、〈夫婦の寝室〉は、旧校舎という特異な舞台に、時間とともに腐食していく金属と布という、完成された方法を適合させたものです。この二人の傾向は正反対にも見えますが、しかし、どちらも、日本という未知の場所での異文化との遭遇を通して、自己の素朴で原初的な、そして伸びやかな資質を再発見したように思われます。

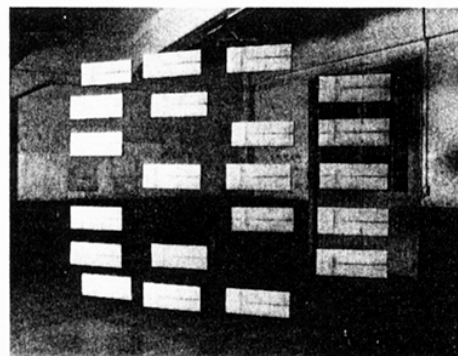
これとは逆に、10月に会場をブリュッセルに移したときは、ベルギー作家たちの作品には、一様に一種の緊張感が漂っていました。これは、会場となったサンカントネール公園の、社会的性格が大きかったかもしれませぬ。石でできた記念建造物である、サンカントネール凱旋門の回廊を舞台として、作家たちは、歴史と生活の厚みに対して、個の芸術性をいかに拮抗させ得るかが問われていたのです。半年前の東京での経験が、そのまま単線的に発展するというような楽観は許されませんでした。しかし、何人かの作家は、確かな成果を示しました。たとえば、大きな回廊の床面から天井にかけて、日本の床柱からヒントを得たという、巨大な石膏製の樹木を屹立させたテレーズ・ショットーの作品は、ヨーロッパの理知の象徴たる凱旋門の幾何学性を充分異化しました。また、石の回廊に垂れ幕を下げ、その陰のなかに椅子だけを配置し、さらに、

壁面に、椅子の置かれたようすを無彩色で描いたタブローを配置した、セルーの作品は、サンカントネール公園が人々に強要する歴史の栄光を、虚無的に解体する効果を持っていました。

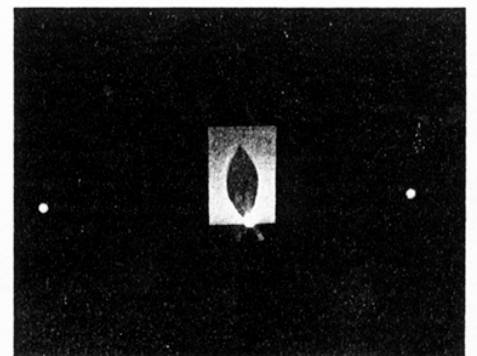
この交流展に参加した若手作家たちの大半は、高名というわけではありません。しかし、東京とブリュッセルで示した、かれらの制作性向、つまり、一方には、芸術作品生成時の素朴で生な瞬間に対する同意があり、他方には、社会に対峙したときの、芸術の方法と理念に関する先鋭な意識がある、という二面性は、ベルギーの作家全体に認められるのではないかと思います。そして、おそらくこれは、ルネ・マグリットの、あの、ある種素朴でいながらアイロニーに満ちた作品群につながる性質でもあると言えるでしょう。ヨーロッパ近代史において、大国の狭間で翻弄されてきたこの

国家は、独立性確立のために多くの血を流してきました。その国民的な課題は、ECの中心となった現代でも、脈々と生きています。そして、それは、フランスでもなく、ドイツでもない、またオランダでもないこのベルギーで、〈ベルギーの芸術家は何を成し得るのか〉という問題意識の底流となっているでしょう。

経済的条件でいえば、ベルギーの若手作家も裕福であるわけではありませんが、交流展に参加した作家たちは皆、広々としたアトリエを保有していました。また、多くのギャラリーのうち、かなりの数が、コマージュリズム活動とは別に、若手作家を支援するプロジェクトを恒常的に企画しています。この意味では、ベルギーの現代芸術もやはり、ヨーロッパ文化の一員であることは確かなようです。



ミッシェル・ムーフ「夫婦の寝室」1991年
撮影：長谷川毅男



ベルナール・ヴィレル「こんにちは、マグリットさん」1991年
撮影：長谷川毅男